

東京洋傘

石山洋

子どもの頃、父の背中と共に見慣れた洋傘を、
今度は作り出す側へ——。
二人の師の教えを道標に、この道を歩み続ける。



いしやま ひろし ●
1970年生まれ。
2025年、東京都伝統工芸士に認定。
東京都中央区東日本橋 3-9-7



上/わずか1mmのずれが仕上がりに大きく響く、生地のカ断作業 下/生地や骨だけではない。様々な小さなパーツが組み合わさり、一本の傘が生まれる

店頭で触れる笑顔に さらなる向上を誓う

小宮商店の店内。職人が減少の一途を迎える中、次代の担い手の育成にも力を入れている



生涯理想を追い求める 師の想いを引き継いで

耳に心地よく響くミシンのリズム。傘の完成像が徐々に見え始めてくる。この道七〇年を超える匠・菅澤勝美さんを師と仰ぎ、日々理想の傘づくりと向き合い続けているのが、東京都伝統工芸士の石山洋さんだ。「職人としてはかなり遅いスタートでした」と自身でも語るように、石山さんが傘職人の道を志したのは三八歳の頃。東日本橋の洋傘専門店「小宮商店」で営業職として働く父・清さんの背中を見て育ち、家には東京の名工が仕立てた傘が数多く置かれていたが、自身が職人になることは考えたこともなかったという。「父の葬儀に参列していただいた小宮（宏之）社長が『社内で洋傘の未来を



師匠の菅澤さんと。「弟子の私にも『悪いところがあれば遠慮なく言ってほしい』という言葉が、生涯勉強なのだと教えてくれます」

担う傘職人を育てたい」という想いを語り、私を誘ってくれたんです。長年父がお世話になった店に思い切って飛び込むことにしました」子どもの頃から傘に囲まれて育ったとはいえ、本格的に傘について学ぶのは初めて。菅澤勝美さん、小柄正一さんという傘業界の「レジェンド」と仰ぐ二人の下に通い、部位の名称や傘のつくりなど、全て一から覚えていった。生地と親骨を縫う「中綴じ」、傘の先から水が漏れないよう天頂部を縫う「天かが

り」そして生地の裁断……。覚えることは多く、ミシンを使うことを許されるまでに数カ月を要したという。研鑽の日々を経た石山さんは職人になって十六年後の二〇二五年、二人の師匠と同じ東京都伝統工芸士に認定された。「伝統工芸士に認定されたことはとても嬉しく、ありがたいことですが、師匠と肩を並べるなんておこがましい。まだまだ道半ばです。今日は一日良い仕事できた、日々それを積み重ねていきたい」と静かな決意をにじませる。現在傘職人として傘の製造を行うだけでなく、小宮商店のスタッフとして店頭で修理やメンテナンスの相談も受けている石山さん。そのことが職人として大いにプラスになっているという。「作業場にもっている時には出会えないお客

様の反応や声に直接触れることができるのが、職人として本場にありがたいこと。修理に持ち込まれる傘はどのように日頃使っていて、どこが壊れたのか。元通りに修理された傘を受け取る時の嬉しそうな笑顔。愛用の傘の感想を伝えて下さる方もたくさんいらっしゃるようです。私達が作り届けているのは、ビニール傘の数十倍以上の価格がする国産傘。長く使いたい、直しても使いたいと伝えて下さるお客様の思いに応えられる職人でありたい」理想とするのは形が美しく、開きやすく閉じやすい、そして畳みやすい。雨の日が嬉しくなるような傘。取材の終わり、「より良い傘を今なお追求し続けている師匠・菅澤さんの姿勢まで引き継ぎたい」という声が強く響いた。